

続・保育の中の小さなこと大切なこと⑫

守 永 英 子

十月も半ば、二週間ほど後に運動会を控えて、年長組の子どもたちのグループが、レコードに合わせて、庭で、ゆうぎを始めた。三才児クラスの子どもたちも、何人かは、それに気づいて眺めていたが、そのうち男児Rが、「ほくたちも体操するの？」と問いかけてきた。午後には、ハトポッポ体操のレコードを、庭に流す予定であったので、「おべんとうのあとで、いっしょにしましょうね」と言うと、Rは、「ふうん」と言っただけで、自分の遊びを続けた。

年長組の、運動会の雰囲気作りに合わせて、部屋でもレコードをかけ、動いてみせると、数人の女児は、喜んで、一緒に踊り始めた。しかし、Rが、泣き声で「レコードを止めてよ」と、いやがったので、「もっと、踊ろうよ」と言う女児たちに、「又、今度しましょうね」と言っただけで、直にやめることになったが、そのことを、私は、それほど深く気に留めていなかった。

ところが、おべんとうが済むと、Rが、急に、泣

いてぐずり始めた。「もう帰る。ママのところに行く。」とうとう玄関に椅子を持ち出し、「ここでママを待つてる。お部屋には行かない」と、激しく泣き出した。なだめながら、やっと聞き出したのは、「体操をするのがいやだ」ということ。思いがけない激しい拒絶に、いささか驚いたが、「しなくてもいいのよ」となだめて、部屋に連れ戻り、水槽の金魚や田にしを見ながら、気を紛らせた。初めての体操でもあり、「今日は、見ていただけにしようかしら？」と思っている私に、女兒たちは、「又、踊ろうよ」と誘いかける。結局、しり込みしているAとRを、「ここで見ていてね」と、部屋の入口に残して、他の子どもたちと、体操に参加し、その間、Rは、くずっていた。

こうして、その翌日から、Rの日課が始まった。「ぼく、体操をしないよ。運動会もしないよ」と、毎朝、念を押すのである。「いいわ」と答えながら、私の心は揺れた。できれば参加してほしい、でも、

Rにとって、とてもいやなことならば、無理にさせることはやめようか……。迷いながら、一週間、私は、Rを刺激することを控え、働きかける方向を変えることを考えた。運動会の帽子の用意が出来たのをきっかけに、「みんな、＼＼＼、ドン、／＼」をやるから、応援してくれる？」と誘いかけ、やっと、ささやかな声援を得られたのが、Rの、運動会への参加の第一歩であった。相変らず、「体操をしないよ」を繰り返していたが、部屋でかけるレコードも、「これは体操じゃないの。おゆうぎよ」、「体操しないよ」、「でも、Rちゃんの手ポッポ、とても上手よ」、などというやりとりのうちに、次第に、一緒に動き始め、うれしそうな表情さえ、浮かぶようになった。

「体操はしないよ。運動会もしないよ」という、毎朝の日課は続いていたが、運動会も無事に参加し、「これが運動会だったの」と言って、又、私を驚かせた。

「体操」「運動会」という言葉に、彼は、一体、どんなイメージを持っていたのであろうか。拒絶しなければならぬようなイメージが、何時、どこで、どうして作られたのであろうか。

思い当ることもないまま、母親に尋ねてみた。入園前に、音楽教室に行き、毎回、泣いていやがり、三か月でやめたこと、最近も、水泳教室に通い始めたが、いやがっていること、皆で一斉にさせられることが、とても、いやらしく、入園前から、幼稚園の集団生活も続くかしらと、危ぶんでいた、ということであった。

運動会が済んでも、毎朝の、「体操しないよ」という日課は、しばらく続いた。いつまで続くのだろうか、と思いつつながら、その言い方に、少し「ゆとり」をみせてきた彼の気持ちの変化を感じて、私も、対応の仕方を変えて、正面から、受けとめてみることにした。「Rちゃんは、自分ができないような、

むずかしいことをするんじゃないかと思って、心配なの?」「うん」「幼稚園では、Rちゃんが一生懸命やってもできないような、むずかしいことは、しないわ。この会話のあと、二日間の休みを境に、Rの日課は、ピタリとやんだ。

いろいろな言葉の持つイメージは、個々の子どもによって異なり、その違いは、子どもが育つ上で、重要な意味を帯びてくるように思われる。「おとな」「先生」「友だち」「幼稚園」など、様々な言葉が、どのようなイメージに作られていくか、その責任の一端を担っていることを思うとき、小さな事も、おろそかにはできないのである。

||了||
(お茶の水女子大学附属幼稚園)

